

「ことばの台所」で

—Gertrude Stein の反復と公平さの概念

宮 澤 直 美

要 約

本稿の目的は、Gertrude Stein の抽象詩の根底に横たわる公平さという概念を確認するとともに、反復という技法がこの公平さと密接に連動している点を明らかにすることである。伝記的作品 *The Autobiography of Alice B. Toklas* (1933) からは、あらゆる階級や境界線を排除し、皆を同等の視点で照らし出す Stein の公平な視線、そして日常の言葉への敬意を読み取ることができる。区別、境界を取り払った世界の中で、あらゆる事物や人間を公平な視点で捉える視線は、reasonable と berry とを結びつけるといった新奇な単語の組み合わせを生み、Stein 文学の特徴である言葉の異化効果をもたらしてもいるのだ。また、*The Making of Americans: Being a History of a Family's Progress* (1925) や “Many Many Women” において、繰り返される人間の歴史を表現するために、反復という技巧が使用されている点に注目した。この技法は、個人を多数の人間・先祖との繋がりの中で再定義し、他者との境界を取り払うために選ばれた方法なのではないかと考えた。本稿では、権威を持たない日常の言葉を、真理追究のための助けとして再発見した彼女の詩作の「本質」(bottom nature) に公平さという概念がある点を考察した。

キーワード：アメリカ文学、ガートルード・スタイン、抽象詩、反復、民主主義

序

まだ誰もその存在すら知らなかった Paul Cézanne (1839-1906)、Pablo Picasso (1881-1973)、Henri Matisse (1869-1954) の絵を発掘したアメリカ人女性、Gertrude Stein (1874-1946)。彼女の実験的な抽象詩は、初期のキュビスト絵画の多くが酷評をかったように、ほとんどの読者を当惑させる。第一次世界大戦を挟み、祖国アメリカを離れパリで暮らしたユダヤ系アメリカ人の Stein は、フルールス街 27 番で Picasso や Matisse との親交を深め、前衛的な作品を送り出してきたものの、その極端な抽象性、ロジックのない文章ゆえに、多くの読者をもちえるタイプの文学者にはならなかった。数少ない早くからの理解者である William Carlos Williams (1883-1963) は、科学、哲学、宗教のもつロジックを否定し、言葉によってすべてを超越しようとするのが Stein の特徴だと述べている (22)。真理に近づく方法として、科学、哲学、宗教はそれぞれのロジックを持って核心を掴もうとする歴史を歩んできた一方で、Stein が追究したのは、ロジックを拒絶し、ロジックのない言葉によってすべてを超えようというものだった、と。

確かに、Stein は文法的破格、句読点の削除、反復、連想の飛躍を多用して、論理的な文章とは正反対の抽象詩を作り出してきた¹⁾。では、Stein は何故この表現形態を、敢えて選んだのであろうか。本稿では、Stein 文学を特徴づける反復と突飛な語彙の結び付けに焦点を当て、Stein の抽象詩の根底にあるものを探ってみたい。彼女が文法という決まりや、慣習的表現を否定することで排除しようとしたものは、人間間の境界や差であり、それは、あらゆる事物や人間を公平な視点で捉えるために彼女が編み出した方法であったように思える。彼女は、料理と立体画、抽象詩を同列に配し、メイドや兵隊さんを Picasso, Matisse と同等に扱う。その描写からは、単に異なったもの同士を結びつけることによって生じる異化効果だけでなく、事物の間に階段を設けない彼女の民主的精神を感じることができると言える。まず、*The Making of Americans. Being a History of a Family's Progress* (1925) と “Many Many Women” を中心に、繰り返される人間の歴史を表現するための手段として、反復という技巧が選ばれている点を確認したい。その上で、ロジックで築かれた 19 世紀の世界観からの飛躍を目指した彼女の詩作の「本質」(bottom nature) として、公平さという概念があることを、伝記的作品 *The Autobiography of Alice B. Toklas* (1933) を通じて照射する。

1. ロジックのない言葉

Stein が非論理的な破格の文章形態を選んだ理由を、まずは他の女性作家との関係の中で考えてみたい。Stein が、父権的な 19 世紀アメリカからの決別を目指していた点に留意するならば、ロジックの拒否は父権制へのアンチテーゼと解釈することが出来るからだ (金関 79)。男性が科学、哲学、宗教を語ってきた歴史の中で、言葉は男性化されてきたと仮定するならば、その言葉を浄化するために、敢えて科学や哲学になくしてはならないロジックを廃し、ロジックのない言葉を選んだのではないかという推察が成り立つ。

19 世紀アメリカで活躍した女性作家たちのことを考えてみたい。彼女たちは、男性が築き上げた書き言葉と知識とを模倣するか、あるいは煽情小説家になるか、男性の偽名を使って書くか、という選択を迫られていた。Margaret Fuller (1810-1850) の *Woman in the Nineteenth Century* (1845) に顕著であるように、高い教育を受けた一部のフェミニスト達は、男性に負けじとその有能性を誇示し、あるいは Nathaniel Hawthorne (1804-1864) に “America is now wholly given over to a d___d mob of scribbling women” (Hawthorne 304) と言わしめるほど流行していた煽情小説の担い手となっていた。もしくは、*Little Women* (1868) で有名な Louisa May Alcott (1832-1888) のように、ピューリタニックな伝統を重んじる家庭像を描く一方で、男性のペンネームを用いて、生活の糧のためにホラー小説家として、仮面を被ることを選んでいた作家もいた。

Stein は、こうした女性作家への制約をすべて払いのけるような新奇な書き方を提案した。

Katherine Anne Porter (1890-1980) が Stein の *The Making of Americans* について次のように述べている。*The Making of Americans* の初めには, “careless sentimental novel” が多用するような言い回しがたくさん出てくる, しかしそのあとで Stein は, 古いものをコピーしていたことを認め, それを恥じている, “later Miss Stein explains she was copying an old piece of writing of which she is now ashamed. . .” (Porter 11-12) と。「女のもの書きども」と言われたセンチメンタリズムとの決別が記されているのだ。

Stein はまた, ギリシア古典知識を盛り込み, 論述形式で書かれた Fuller の限界を超えるかたちで, 19 世紀の父権的な言説からの離脱を試みてもいる。Fuller の限界は, 男性的な論理と言葉が作り上げた宗教, 科学, 哲学などの膨大な知識を習得し, それらを否定するのではなく, その体系の内側で, 女性の地位を確立しようとした点にある。その一方で, Stein は, 男性が作り出した論理的な伝統である文法さえも無視し, 新しい時代を作ろうとしたのだ。Stein の文法的破格, 句読点の削除, 反復, 連想の飛躍は, 男性的な 19 世紀の言葉の呪縛から言葉を開放するプロセスとして理解できる。男性的な使用ばかりによって締め付けられてきた言葉, 女性に課された貞節な言葉の使い方から, 「やさしい釘」—女性の乳首, 女性性器だという解釈もある (ウィルソン 123) —を自由にしようとする純化作用なのである。男性攘夷主義的な文化が築いてきた宗教, 科学, 哲学を, フェミニストの先駆者であった Fuller とは全く逆の方法で打ち崩そうとしたといえるだろう。ただ, ここで立ち止まって考えなければならぬのは, 彼女の文学を, 女性作家の流れの中だけで捉えようとする, そのこと自体の限界である。彼女の言葉は, ラドクリフ大学時代の恩師 William James (1842-1910) の自動作文の実験などを契機に, 男性, 女性という枠組みを超越して, 19 世紀という時代そのものからの飛躍を目指していたといえるからだ。

Edmund Wilson (1895-1972) は, Stein の言葉は伝統的な視点から見ればナンセンスかもしれないが, それは抽象画のキャンヴァスに描かれる “unidentifiable fragments” (16) と同じだとして, その前衛的要素を評価している。その言葉は, 言葉が背負わされてきた象徴性や伝統から言葉を開放することを文学の目的としているのだ。“She had come to believe that words had other values than those inherent in their actual meanings, and she was attempting to produce a kind of literature which should work with these values exclusively” (Wilson 16)。

文法を拒否し, 論理的な思考を無視する Stein の書き方には, Picasso ら抽象派が目指したものと同じ, 19 世紀の論理的思考方法を打ち破るための新たな挑戦があったはずだ。確かに彼女の挑戦は 19 世紀という時代全体を敵とみなしている点で, トランス・ジェンダー的と言えるだろう。彼女の実験が, 女性解放だけを目指すものではなく, 言葉そのものに染み付いてしまった伝統という足枷からの解放を目論むという壮大な目標を掲げていたことがわかる。Jean-Jacques Rousseau (1812-1878) は『言語起源論』(*Essai sur l'origine des langues*) の中で次のように述べている。「哲学の研究と理性の進歩は, 文法を完成させ, はじめのうち言語

を歌うようなものにしていて、あのいきいきとした情熱的な調子を、言語からうばい去ってしまった」(202)。Steinは、ロジックや文法の発達によって書きことばから奪われてしまった情熱、元来の「詩人の言語」(ルソー 144)、情念を呼び起こそうとしているのだ。

Steinを女性作家の系譜の中に押し止めて捉えることの限界は見てきたとおりだ。ただ、このことは、だからといって彼女の書き方に女性性を見出すことを妨げるものではない。彼女の挑戦をジェンダーから完全に切り離して論じることが正しい理解に至るとは考えにくいのだ。おそらく、Alice B. Toklas (1877-1967)を愛し、同時にErnest Hemingway (1899-1961)をも愛したSteinのセクシュアル・アイデンティティーと同様に、彼女は男性的、女性的という縛りから自分の「頭を開放して」²⁾、自身を表現することに徹している、とも言えるだろう。ただそれでも尚、彼女の書き方からは、女性性や母性が流れ出しているのだ。それは、彼女の文学の最大の特徴ともいえる反復とcontinuous presentという発想が、女性性と切り離しては考えられない点に起因する。次のセクションでこの点について論じたい。

2. “Many Many Women” の continuous present と母性

Steinはあらゆる人の「本質」(bottom nature)を引き出すために、繰り返しの方法を用いて、「『現在分詞中の』人物を描くことだけが、なんらかの真理を伝達できる」と考えていた(金関 212)。このセクションで取り上げる“Many Many Women”は、ほぼすべて次のような現在分詞、あるいは現在進行形の連鎖で成り立っている。“There are many who are telling anything in some way. Every one is one telling something in some way. One was one telling anything in one way. That one was one being that one.” (“Many Many Women” 143)。現在の連続性の中にのみ存在を見出すというこの考え方は、時間の存在を視覚化し、絶えず流れゆく時間の中での人間存在を捉えようというものだ。換言すれば、これは時間の流れ、生きている動き(movement)を捉えることである。まさに、Marcel Duchamp (1887-1968)の「階段を降りる裸体」が描き出した世界を言葉で表現しようとしたのだ。この捉えがたい概念を私は、水面下のものを見るという行為に置き換えて考えてみた。水面下にいる魚の動きによって、水は波紋を広げ、絶えず動いている。水の動きは魚の動きと連動している。そして、それを見る人間の目には、水の波動(時間)と、そしてその波動によって歪んだ魚(存在)の形が映る。水の存在は、時間の流れと存在の動きとを同時に見せてくれるのだ。それによって、我々は単に魚という事物を捉えるのではなく、動き続けている／生き続けている魚の存在、今という時間の連続を、波紋を介して体験するのではないだろうか。Steinの用いるcontinuous presentや反復は、時間の流れと、その時間の中に生きる我々の存在、真理、動き(movement)を、文字で表現するために彼女が編み出した書き方といえるのではないだろうか。

では、絶え間なく続くcontinuous presentのなかで存在する我々の真理とは如何なるもの

であろうか。Steinは伝記の形態をとった作品、*The Making of Americans*のなかで次のように書いている、“Always from the beginning there was to me all living as repeating” (*The Making of Americans* 57)。Jayne L. Walkerも述べるように、すべての生きとし生けるものを反復として捉える感覚は、繰り返される生命の誕生という人間の歴史を表している(178)。作品中で、怒った息子が老いた父親を引きずって果樹園のなかを進むという場面で、その父親が言う台詞、“Stop! I did not drag my father beyond this tree” (*The Making of Americans* 32)に端的に表れるように、この作品では父親から息子へ受け継がれ、繰り返される歴史がテーマの一つになっている。

同様のテーマは、“Many Many Women”にも表れている。その書き出し部分に注目してみよう。“Each one is one. Each one has been one. Each one is remembering that thing” (“Many Many Women” 126)。まず、“Each one”が記憶している“that thing”とは何かが気になるはずだ。もちろん、それを具体的に説明する言葉はないのだが、読み進めていくうちに、主語が“Each one”から“She”に変わっていく点に気がつく。大きな時間の流れの中で考えれば、我々個人は先祖という無数の個人／oneの遺伝子の集合体である。頭の中の記憶としては失われているが、遺伝子レベルで保存されている先祖／oneの寄せ集めである。その情報の通過地点としての母体、女性の身体を、“She”は表現しているのではないだろうか。*The Making of Americans*のなかで、すべての細胞がその個人の情報すべてを内包しているのだ³⁾、という記述があるが、細胞の中で、遺伝子として生き続ける人間のcontinuityをここに読みとるならば、“Each one”が記憶している“that thing”とは、先祖の記憶であり、人類の歴史という記憶だといえるのではないだろうか。

さて、主語の変化に再度注目したい。主語は“Each one”から“She”を経て、“Some”になり、“Many”になり、最後に“Any one”、“one”に戻ってその円環を閉じている。あたかも妊娠中の女性が、個人／each oneであると同時に、胎児を内包するという点で、すでに複数／manyでもあったり、あるいは、我々が個人であると同時に人類の遺産としての複数の遺伝子の集合体であることを示すかのようだ。単数形は複数形に置き換えることが可能なのだ。母体／sheを介して繰り返される生きる営みが、底を流れるテーマの一つであろう。つまり、反復という技巧的手法は、繰り返される歴史というテーマを語るために選ばれた手段なのだ。

繰り返される反復は、その度にわずかな差を生むのも事実である。完全なるrepetitionはないと言っているSteinの言葉通りだ。“Rose is a rose is a rose is a rose” (“Sacred Emily” *Geography and Plays* 187)を例にとれば、ひとつめのroseはふたつめのroseとは違う。なぜかという、ひとつめのroseを読んだ人間の心には、その記憶がすでにあり、その上をふたつめのroseが通り過ぎるからだ。パリンプセストのように、すでに付着したひとつめのroseの記憶の上に重なり合うふたつめのroseは、純粹にまっさらな頭の中に飛び込んできたひとつめのroseとは別のroseになるのだ。息子に引きずられてゆく“father”には、自分の父

親を同じように引きずった歴史があっても、この“father”は、あの父親ではないように。同じ行為の繰り返しの中でも、差は確かに生じている。逆の言い方をすれば、父親は一人目の“father”ではないのだが、同じように息子に引きずられてゆくという繰り返しの中で、パリンプレストを織りなす人間の歴史を物語っているのだ。“Many Many Women”の最後は、“... , and one and one, and one and one and one and one.” (222) で終わるのだが、これも、同様に解釈することができる。たくさんの個人が、繋がって“Many Many Women”になっている歴史として。Stein が、“Sometimes it is very hard to understand the meaning of repeating” (*The Making of Americans* 61) と言っているのは、生まれては死んでゆく人間存在に意味を見出すことの難しさを示しているように思える。

William Carlos Williams が興味深いことを言っている。考えることを教えられると、我々の心は論理的に動き、結論やゴールに向かっていく。しかし一方で、心が「動き」(movement)だけを求めて、どこに向かうでもなく、ゴールのない、変化の過程のみを受け入れる場合もある、“Either, we have been taught to think, the mind moves in a logical sequence to a definite end which is its goal, or it will embrace movement without goal other than movement itself for an end and hail ‘transition’ only as supreme” (22) と。そして、そのどちらか一方を選んでも、心というものをすべて表現することは不可能だ、と言っている。つまり、その両方が必要なのだが、Stein の文学がしてみせたのは、ロジックのために「動き」(movement)を止めることなく、ゴール、真理を目指すということだった、と (23)⁴⁾。前者の論理的思考によるゴールの追及、換言すれば科学や哲学、宗教という分野は、男性的な言葉が独占してきた分野である。そして movement を止めない、continuous present という表現は、永続的な再生産を繰り返す女性の身体表象でもある。Stein は、この両者を融合させ、論理性という男性的な鎧を廃し、反復という女性性を全面に出しながら、人類のための真理を目指したのではないだろうか。

ここまで彼女の女性性に焦点を当ててみてきたが、彼女の実験的な書き方が生まれる背景に、多くの男性たちの影響があるのも見落とせない事実だ。先に述べた William James だけでなく、哲学者 Alfred North Whitehead (1861-1947)、パリのフルールス街 27 番に出入りした多くの天才たち、なかでも Picasso, Matisse ら抽象絵画の巨匠たちとの親交は絶大な影響をもたらした。彼らをもてなす土曜日の夕食では、Stein が天才たちの隣に、そして Alice は、天才の、準天才の、そして未来の天才の夫人たちの横に座って話し相手になったそうだ (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 14)⁵⁾。次のセクションでは、*The Autobiography of Alice B. Toklas* を取り上げ、ロジックを拒否した Stein がみせる母性的な民主性という視点に注目してみたい。

3. *The Autobiography of Alice B. Toklas* における民主性

The Autobiography of Alice B. Toklas の中で印象的なものの一つに、ボンヌ (bonne) への言及がある。Stein と Alice のメイドであった Hélène は、早くも冒頭の数ページで、次のように紹介される。“She was one of those admirable bonnes in other words excellent maids of all work, good cooks. . .” (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 7). Picasso, Matisse, そして Hemingway との遭遇を期待して読み始める多くの読者にとって、冒頭のわずか数ページで、まず Stein が取り上げたのが、メイドさんであることは意外な印象を残すだろう。有名な画家と詩人への少なからずともゴシップ的関心から頁を捲った読者は、その期待を裏切られる。そんな読者の中には、自分自身の中に潜む階級意識、差別意識に気づく人さえいるかもしれない。反して、Stein の Hélène の描き方は、肉親を語るような温かみを帯びている。“She was a most excellent cook and she made a very good soufflé” (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 7) といって語られる Hélène は、のちに語られる Matisse や Picasso と同様に、生き生きとした存在感を持って、そして敬意をもって語られるのだ。そのことをよく示す例がある。Hélène は、Matisse が嫌いなので Matisse が来るとわかっている土曜日の晩さんには、オムレツではなく卵のフライを作って出すことで尊敬の度合いを幾分減らしていた、というのだ (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 8)。Matisse は Stein のお客さんであるのに、そのようなことを Hélène がしているものか考えたくもなる。しかし、このことを書き綴る Stein の言葉からは、Hélène への愛情こそ感じられても、批判的な態度は読み取れない。むしろ Hélène を尊重して言うのだ、“Hélène had her opinions, she did not for instance like Matisse” (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 7) と。Matisse は Stein の客人であるのと同時に、Hélène のもてなしを受ける人でもあり、台所は Hélène の城である以上、お客さんが誰であろうと彼女の意見は尊重されるべきなのだ。Stein のこの愛情のこもったユーモラスな描写によって、Hélène の存在は、この作品の中でひときわ印象に残る人物になるのだ。*The Making of Americans* でも servant girl, governess, dressmakers が登場するように、Stein の取り上げる人物は、誰かに奉仕する役割を担っていることが多い。次に挙げる「兵隊さん」(doughboy) もそうだ。

第一次世界大戦中、Stein たちはアメリカから一台のフォードを取り寄せ、運転を覚え、「フランス傷病兵のためのアメリカ基金」の一員として車を走らせた。その功績によって、フランス政府からルコネイサンス・フランセーズ (Reconnaissance Française, フランスの感謝) (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 179) という勲章を授与される。このエピソードで大事なのは、二人が道を歩いている兵隊を誰でも同乗される習慣を始めたことだ (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 174)。さらに、この民主的な習慣は、「フランス陸軍の民主的精神」(“the democracy of the french army”) (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 174) を見出すこと

にも繋がる。ある日、フォードを走らせていた Stein と Alice は、休暇のため家に歩いて帰る途中のフランス人兵士 3 人に出くわした。3 人は、それぞれ中尉、軍曹、兵隊の身分であった。一人だけならば、車に乗せてあげられるという申し出に、3 人は誰の家が一番遠いかを話し合い、一番遠くまで帰る兵隊さんに乗せることにしたのだ、“Then they all agreed that it was the soldier who had much the longest way to go and so it was his right to have the lift. He touched his cap to his sergeant and officer and got in” (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 175)。Stein は、こうして出会った多くの軍人達のなづけ親になり、書簡の交換をし、兵隊たちとの生活を心から楽しんだと記している、“We did enjoy the life with these doughboys. I would like to tell nothing but doughboy stories” (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 184)。兵隊、女中さんたちは、Stein と Alice の民主的な公平さと母性的な寛容性のもとに、Picasso や Cézanne と同じ紙面で、同じ目線で語られる。つまり、すべての登場人物が同じテーブルについているのだ。売れない画家（出会ったころの Picasso）が、売れる画家（後の Picasso）になっても Picasso は Picasso であったのと同じように。

Stein の詩は、新奇な単語の組み合わせに溢れている。例えば、“A very reasonable berry” (“Sacred Emily” *Geography and Plays* 181) もそうだ。reasonable price という言い方はあっても、reasonable が berry を修飾した例は Stein 以前にも以降にもあっただろうか。こうした単語の異常な結び付け方を、単なる言葉遊びと片付けてしまっているのだろうか。私は、彼女の言葉に対する民主的な態度が、この異化効果の背景にあると推測する。言葉を開放するという目的に寄り添う形で、彼女の民主主義的発想が潜んでいるように思えるのだ。それは、台所と書斎、料理と抽象画や抽象詩を区別せずに、公平な視点で語ろうとする彼女のスタイルの表象でもある。彼女の民主主義は、形を変えて繰り返して表現されている。メイドと主との関係は、それぞれの活躍の場所である台所と書斎／アトリエ（芸術家の仕事場）と換言されるだろうし、その上でさらに、それらの場所から生まれる産物として、台所から生まれる食べ物と芸術家の仕事場から生まれる絵画／詩として表現されるのだ。この点を以下に詳しくみていくことで、彼女の抽象詩の根底にある公平さという概念に迫ってみたい。

Alice の料理本が出版されるほど、Stein と Alice の二人は美味しいものが大好きだった。*The Autobiography of Alice B. Toklas* の中にこのような一節を見つけることができる。まだ誰もその存在すら知らなかった Cézanne の絵を Gertrude Stein と兄 Leo が発掘した画商 Vollard の店は、モンマルトルの大通りにほど近いラフィット通りにあった。その通りには美味しいお菓子屋さんフーケ (the confectioner Fouquet) の店もあったそうだ。その通りは、たまには絵を買う代わりに、ガラス瓶に入った苺ジャムを買ったりできる場所だった、“Also on the rue Laffitte was the confectioner Fouquet where one could console oneself with delicious honey cakes and nut candies and once in a while instead of a picture buy oneself strawberry jam in a glass bowl” (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 29-30)。Cézanne の

抽象画と苺ジャム、この組み合わせを可能にする発想が、詩の中に“Paper peaches are tears” (“Sacred Emily” *Geography and Plays* 186) として登場してくるのではないだろうか。Stein の早くからの理解者、Sherwood Anderson (1876-1941) がSteinを“the woman in the great kitchen of words” (8) と称しているが、台所は書齋であり、お菓子屋のフーケの店は画廊 Volland の店なのだ。同様に、台所に立つ男女は芸術家であり、料理は芸術なのだ。手芸好きな Alice のために、Picasso はタピストリのキャンヴァスに直接、下絵を描いてくれたというエピソードもある。Alice はそのタピストリを織ってルイ 15 世風の椅子二つのシートを飾ったそうだ⁶⁾。つまり、Stein を取り巻く世界には、芸術と日常の営みの間に境界線はないのだ。

それは大戦中に至っても言えたことだった。第一次世界大戦中、Whitehead 夫妻のもとで Whitehead の古き友人として会ったのが Bertrand Arthur William Russell (1872-1970) だった。彼と Stein はアメリカ人心理とイギリス人心理の違いについて熱く語り合う。Stein はアメリカ人の性格の中にある抽象的な資質、“the disembodied abstract quality of the american character” について論じながら、その実例として「自動車もエマソンもいっしょくたにして挙げ」(『アリス・B・トクラスの自伝』217), “mingling automobiles with Emerson” (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 152), アメリカ人にはギリシア文化は不必要だということを立てた、とある。超越主義を掲げ over-soul を謳った Ralph Waldo Emerson (1803-1882) の *Nature* (1836) に、彼女は、「抽象的な資質」を読み取っているようだが、どうして自動車と Emerson が繋がるのか具体的な説明は省かれている。説明を聞けたらいかに面白いだろうと思うが、いずれにせよ、この飛翔、異なるものの結び付けによって生まれる異化効果は、機械と自然の境界線を越えるのだ。

同様な異化は、大砲と抽象画とを結び付けさえする。カモフラージュ（擬装）した大砲をみた Picasso が「これを作ったのはぼくたちだぞ」といった (『アリス・B・トクラスの自伝』128), “C'est nous qui avons fait ça, he said, it is we that have created that, he said” (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 90)。「風景を切断しその中に切り込んでゆく、むしろ風景を切断することでその風景と見分けがつかなくなっている、あの方法」は、大砲や軍艦をカモフラージュする原理だったと Stein は説明している (『アリス・B・トクラスの自伝』128)。

In these pictures he [Picasso] first emphasised the way of building in spanish villages, the line of the houses not following the landscape but cutting across and into the landscape, becoming undistinguishable in the landscape by cutting across the landscape. It was the principle of the camouflage of the guns and the ships in the war. (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 90)

カモフラージュされた大砲と Cézanne や Picasso のキュービズム、自動車と Emerson、これ

らの例にみられるように、機械と芸術はこんなにも近くにあったのだ。それは、女中さんや兵隊さんを、画家や詩人といった芸術家と同じ視線で捉えていた Stein のものの見方に通底している。すべてのものの境界線を超越すること。差別、区別、コンマを、法則、伝統、文法を廃して、頭を開放して、そこに連続性を繋がりや絆をみたのだ。

Sherwood Anderson は言っている、作家たちは「大切な思想や感情を、印刷された頁の中に押し込むのに大忙し」だ、“We are all busy getting these grand and important thoughts and emotions into the pages of printed books” (“The Work of Gertrude Stein” 7) と。彼は、作家たちのことを「僕たちお偉い将軍」, “we great generals” (ibid 7) と呼んで、さらに次のように述べる。将軍である作家が「戦に勝つためには、どうしてもその力を借りねばならぬ言葉の兵隊さんたちは、ずっと放ったらかしにされ、顧みられていない」(「ガートルード・スタインの仕事」13), “And in the meantime the little words, that are the soldiers with which we great generals must make our conquests, are neglected” (“The Work of Gertrude Stein” 7)。Stein の兵隊さんたちとの親交は、彼女の言葉へのやさしさに通じる部分がある。誰にも相手にされない市民としての言葉の間で暮らすことを、彼女はあえて選んだのだ。

Here is one artist who has been able to accept ridicule . . . to go live among the little housekeeping words, the swaggering bullying street-corner words, the honest working, money saving words, and all the other forgotten and neglected citizens of the sacred and half forgotten city. (Anderson, “The Work of Gertrude Stein” 8)

彼女の言葉に対する態度には、女性的な優しさをもった民主性が漂っている。それは身近な言葉／言葉の兵隊さんを、権威的なものから解放し、ロジックという伝統の縛りから解き放つための異化であった。権威を持たない、誰にも相手にされない市民、歩兵としての言葉を、真理を追究するための助けとして見直し、やさしい視線を平等な視線を向け、母性的な暖かさで包むことであったのではないだろうか。そこには、絵画と文学の境はもちろん、台所と書斎、料理と文学、苺ジャムと Cézanne の絵、兵隊さんと詩人、女中さんと Matisse とを隔てる階段は存在しない。皆が等しく同じ時代を、共時的な時間という movement を、フルールス 27 番で共有したという公平さが、Stein によって作られていたのではないだろうか。

皮肉か敗走という手段以外に、どのようにして民主的でいられるかという問題に、Stein は抽象化という手段をもって挑んだのだと William Carlos Williams は説明する。“To be democratic, local (in the sense of being attached with integrity to actual experience) Stein, or any other artist, must for subtlety ascend to a plane of almost abstract design to keep alive” (23). 彼の言葉が興味深いのは、「民主的で、ローカルである（実際の体験にぴったりと寄り添うという意味で）ためには」、スタインであろうと、あるいは他の芸術家であろうとも、抽象

化を選ばなければいけないと述べている点だ。この民主性とローカルの結び付きは、まさに私がここまでの議論してきた内容である。つまりスタインの実際の体験にびったりと寄り添った言葉たちは、彼女の平等さのなかで、“A very reasonable berry”, “Paper peaches are tears”という抽象詩を歌うことを可能にしているのではないだろうか。

同時に、ここで“Plane”にのって飛翔する必要性を Williams が述べている点も見過ごすわけにはいかない。飛行機による飛翔は、敗走ではないのだが、安全地帯への避難とも解釈できる。スタイン一家は、実業家であった父親の成功のおかげで、金銭的にも恵まれた環境にあり、パリに住むことも可能だった。パリからアメリカを眺めるという地理的な距離は、異国に住むことによってアメリカ人としての自分を反芻し、フランス語に囲まれて過ごすことで英語への感覚を研ぎ澄ますことを許してくれた。同時に、生活の糧のために売れる作品を書かざるを得なかった多くの作家とは違い、彼女の財力は、実験のための文学を追究するという特権的な自由を与えてくれた。彼女の自由な民主的精神の実験が、恵まれた経済環境に支えられていたという点において、彼女の民主性には一定の限界があるのも事実だ。その自由な財力があったからこそ可能になったパリでの生活であり、食べるために書く必要のない身の上であったからこそ可能になった実験的作品だったことは否定できない。

また、彼女の理解しがたい言葉は、民主的と呼べないのではないかという疑問も生じてくる。多くの人にとって、彼女の作品の多くは最後まで読むことさえ難しい (Edmund Wilson 15)。では、一部の人には理解できるのかというとそうではない。一部の有識者、あるいは女性のみを対象にして書かれた 19 世紀の白人男性文学、女性文学と袂を分かるところは、彼女の作品が、誰かに向けて書かれているのではなく、すべての人に向けて書かれている点にある。一見、よき読者、理解者としてのターゲットは彼女自分一人であるようで、その個 / One は Many にもなりうる One なのだ。continuous present, 時間の連続性というテーマが、この点においても表現されているように思える。

結び

後に差延という概念を紹介したフランスの Jacques Derrida が目指した「権威なき映画」(デリダ 19)と同様に、真理によっても現実によってもおのれを権威づけぬ作品、人間を目指していた点で、Stein の民主主義は、権威なき民主主義と言ったほうがその本来の意味により近づけるのかもしれない⁷⁾。自動車についての知識がまるでなかった Stein は、行く先々で車を故障させるのだが、必ず見知らぬ誰かが助けてくれた。これを周りの人たちはとても不思議がっていたようだ。すると Stein はこう言ったという。自分が有能ではなく、気さくで、民主的であれば、人は助けてくれるものよ、と。

Now as for herself she[Stein] was not efficient, she was good humored, she was democratic, one person was as good as another, and she knew what she wanted done. If you are like that she says, anybody will do anything for you. The important thing, she insists, is that you must have deep down as the deepest thing in you a sense of equality. Then anybody will do anything for you. (*The Autobiography of Alice B. Toklas* 174)

重要なのは、心の奥底に公平さをもっていること、そう語る彼女の言葉からは、Picasso や Matisse, そして多くの兵隊さんやメイドたちを、苺ジャムと絵画と同様に、同じ視線で捉えようとする彼女の公平さを読み取ることができる。確かに、彼女の実験的な作品は、恵まれた財力によって実現された生活によって支えられているのは事実である。しかし、彼女の心の底を流れる公平さは、彼女の作品を民主的なものに作り上げてゆく根源であったのではないだろうか。

注

- 1) 金関寿夫がStein「学会」ではなく「ファン・クラブ」的なもののほうが、Steinを語るのに似つかわしいと述べているが(345)、まさに学会的な論理的で分析的な言葉を拒否する力がSteinの言葉には働いているように思える。
- 2) William Jamesが授けたアドバイスの言葉として金関が紹介している(金関72)。
- 3) “Just as every cell bears within it the characters of the whole individual” (qtd. in Walker 180).
- 4) Jayne L. Walkerは、“logical order”と“linear, chronological order of narrative”という言葉を用いて、William Carlos Williamsと同様のことを述べている。“This path to wisdom, far from smooth, corresponds neither to the linear, chronological order of narrative nor to the logical order of conventional expository prose” (Walker 184).
- 5) *The Autobiography of Alice B. Toklas* を書こうと決心するまで、しばしばAliceは“The wives of geniuses I have sat with”という本を書くのだと語っていたという記述があるほどだ(*The Autobiography of Alice B. Toklas* 14)。
- 6) 金関はイェール大学で、実際にこの椅子に腰かけた体験についても言及している(300)。
- 7) 「そもそもそれこそが追及されていたことだ。権威なき映画、どんな点でも権威をなさない作品。それは〈真理〉ないし(目撃証人のいる純粋なドキュメンタリーのように)〈現実〉によっても、〈フィクション〉の自由自在な〈至上権〉によってもおのれを権威づけない」(デリダ19)。

引用文献

- Anderson, Sherwood. “An American Impression.” *Modern Critical Views: Gertrude Stein*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986. 7-8. Print.
- . “The Work of Gertrude Stein.” Introduction. *Geography and Plays*. By Gertrude Stein. Madison: U of Wisconsin P, 1922, 1993. 5-8. Print.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Letters. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Thomas Woodson et al. Vol. 17. Columbus: Ohio State UP, 1987. Print.
- Porter, Katherine Anne. “Everybody is a Real One.” *Modern Critical Views: Gertrude Stein*. Ed. Harold

- Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986. 9-12. Print.
- Stein, Gertrude. *The Making of Americans. Being a History of a Family's Progress*. 1925. *A Stein Reader: Gertrude Stein*. Ed. Ulla E. Dydo. Evanston: Northwestern UP, 1993. Print.
- . “Many Many Women.” *The Gertrude Stein Reader; The Great American Pioneer of Avant-Garde Letters*. Ed. Richard Kostelanetz. New York: Copper Square Press, 2002. Print.
- . “Sacred Emily.” *Geography and Plays*. 1922. Madison: U of Wisconsin P, 1993. 178-88. Print.
- . *The Autobiography of Alice B. Toklas*. 1933. New York: Vintage Books, 1990. Print.
- Walker, Jayne. L. “History as Repetition: ‘The Making of Americans.’” *Modern Critical Views: Gertrude Stein*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986. 177-99. Print.
- Williams, William Carlos. “The Work of Gertrude Stein.” *Modern Critical Views: Gertrude Stein*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986. 19-24. Print.
- Wilson, Edmund. “Gertrude Stein.” *Modern Critical Views: Gertrude Stein*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986. 13-18. Print.
- ウィルソン・夏子『ガートルード・スタイン：20世紀文学の母』未来社，2001年。
- 金関寿夫『現代芸術のエポック・エロイク：パリのガートルード・スタイン』青土社，1991。
- ガートルード・スタイン『アリス・B・トク拉斯の自伝：わたしがパリで会った天才たち』金関寿夫訳 筑摩書房，1981年。
- シャーウッド・アンダーソン「ガートルード・スタインの仕事」『地理と戯曲抄』ガートルード・スタイン 著 金関寿夫他訳 書肆山田，1992年，9-14。
- ジャック・デリダ，サファー・ファティ『言葉を撮る：デリダ／映画／自伝』港道隆，鵜飼哲他訳 青土社，2008年。
- ジャン＝ジャック・ルソー『ルソー選集6 人間不平等起源論 言語起源論』白水社，1986。

In the “Kitchen of Words”:

The Notion of Repetition and Equality in Gertrude Stein

Naomi MIYAZAWA

Abstract

This thesis tries to examine the idea of equality underlying Gertrude Stein's abstract poetry by focusing on her use of the technique of repetition. Stein's biographical work, *The Autobiography of Alice B. Toklas* (1933), reflects her balanced point of view as well as her respect for ordinary speech. This study assumes that Stein's use of the effect of dissimilation in this work, produced by an unusual combination of words such as “reasonable” and “berry,” emerged from this very sense of viewing the world without any hierarchies and boundaries. In addition, the study examines *The Making of Americans: Being a History of a Family's Progress* (1925) and “Many Many Women.” In both these works, the writing technique of repetition suits the content—a depiction of the cyclical nature of human history. By employing repetition and creating sequences, Stein tried to redefine the individual as someone connected with his or her ancestors and other human beings. This thesis proposes that the notion of equality comprises the “bottom nature” of Stein's poetry, which rediscovered the importance of ordinary speech that is not caught up in any scheme of power or authority and thus assists the artist in the pursuit of truth.

Keywords: American Literature, Gertrude Stein, Abstract Poetry, Repetition, Democracy